

学習者コーパスに見られる 「テイナイ」の使用順序

— 縦断的・横断的観点から

趙麗雯

◆要旨

従来のアスペクトの習得研究は「テイル」を中心に行われており、「テイナイ」の習得状況は明らかにされていない。本稿は、アスペクト表現「テイル」と「テイナイ」の非対称関係の観点から、「テイナイ」を独自の文法事項と捉え、その習得状況を考察した。まず、「テイナイ」の用法を分類した。その上で縦断的コーパス（C-JAS）及び横断的コーパス（KYコーパス）という2種類の学習者コーパスを用いて、母語が異なる学習者の使用順序を考察した。その結果、母語が異なる学習者の間に普遍性が見られ、使用順序がほぼ一致していることが明らかになった。これは学習者の母語以外の要因も「テイナイ」の習得に強く関わることが示唆できるため、最後に母語話者からのインプット、教科書の導入順序などの面から分析した。

◆キーワード

「テイナイ」、使用順序、縦断的、横断的、習得の普遍性

◆ABSTRACT

Much of the research on acquisition of “aspect” is around “teiru”, however, the acquisition conditions of “teinai” are still not clear. This paper, based on the unsymmetrical relationship between “teiru” and “teinai”, takes “teinai” as an independent program to investigate its acquisition conditions. The paper first classifies the usages of “teinai”, and then, based on the classification, investigates the acquisition conditions of different native speakers through longitudinal Learner Corpus (C-JAS) and horizontal Learner Corpus (KY Corpus). As a result, similarities are found among different native speakers and the use sequence of each usage is almost the same, which indicates that factors other than the mother tongue influence the acquisition of “teinai”. Therefore, this paper finally analyzes the input of Japanese native speaker and textbooks.

◆KEY WORDS

longitudinal, horizontal, acquisition in common

The Use Sequence of “teinai”
in Learner Corpus
Based on longitudinal and
horizontal research

ZHAO LIWEN

1 はじめに

日本語教育現場では、「テイナイ」は「テイル」の否定形式として導入されるのが一般的である。しかし、実際の日本語母語話者（以下、母語話者）の使用においては、下記のような「テイナイ」が頻繁に使われており、「テイナイ」が単なる「テイル」の否定とは捉えられない場合が多く見られる。

- (1) a: もう夕食を食べたか?
 b: いや(まだ) タベテイナイ。(寺村 1984: 120)
- (2) (警察の事情聴取の場面で)
 a: おととい、事件の現場へ行っただろう?
 b: いいえ、行っていません (行ってません)。(松田 2002: 35)

これについては、工藤（1996）は「(否定と肯定)は形式にきれいな対称的關係にあるが、否定の意味用法は常に対称できる関係にあるわけではない」と述べ、「テイル」と「テイナイ」の非対称関係を指摘している。学習者がこのような非対称関係を十分に意識していなければ、「テイナイ」を単純に「テイル」の否定形式と理解してしまい、「テイル」を正しく使用できるにもかかわらず、「テイナイ」の習得と運用が困難になることが予測される。従って、「テイナイ」を「テイル」と異なる文法項目と捉え、学習者の習得状況を把握することは重要な課題になる。しかし、これまでのアスペクトに関する研究は、ほとんど肯定表現の「テイル」、「テイタ」に焦点を置き、否定表現の「テイナイ」を対象としたものは管見の限り僅かである。そこで本稿は「テイナイ」に注目し、縦断的学習者コーパスと横断的学習者コーパスの両方を用いて「テイナイ」の使用順序を考察し、習得の難易度に影響する要因を探ってみる。

2 先行研究と研究目的

2.1 「テイル」・「テイナイ」の意味用法に関する研究

「テイル」の意味用法に関する研究は金田一（1955）が出発点となっており、様々な視点からなされてきた。代表的な分類をまとめると、表1になる。

表1 「テイル」の意味用法の整理

	用法分類							
金田一 (1955)	進行態		単純状態態	既然態			反復進行態	
藤井 (1966)	動作の進行	持続	単純状態態	結果の残存	経験		反復	
吉川 (1973)	動作継続		状態	結果継続	経験		習慣	
寺村 (1984)	動作や現象が継続している 形容詞的動詞のテイル			結果の状態	現在に意義を持つ過去の事象		現在の習慣	集団としての現象の継続
工藤 (1995)	動作の継続		単なる状態	変化結果の継続	現在パーフェクト		反復	
庵 (2001)	進行中		単なる状態	結果残存	記録	完了	効力持続	反事実
西・白井 (2004)	進行		結果状態		完了		習慣	
許 (2004)	動作の持続	所属職業	形容詞的働き	慣用法	結果の状態	経歴経験	反実仮想	習慣・繰り返し

これらの研究は分類の視点が異なるが、「テイル」の多義性を把握する基準は共通している。ほとんどの研究は「現在」、「動作性」、「継続性」という三つの要素に基づいて、「テイル」の多義性を統括するという点で、大きな違いはないと考えられる（許2000）。

一方、「テイナイ」の意味用法に関する研究は、疑問文「～ニ～シタ？」の否定応答として、「ナカッタ」と「テイナイ」の区別に焦点を当てて、多く行われてきた。寺村（1982）は、「シタ」には、「過去の事実」と「現在の既然」という二つの意味用法があり、「過去の事実」はテンスの用法であり、「現在の

「已然」は現在テンスと已然アスペクトが重なったものであると述べている。さらに、問答では、答えが否定の場合は「過去の事実」である「ナカッタ」と「現在の已然」である「テイナイ」によって、その違いが顕在化すると指摘している。井上(2001)は、「シタ」質問文に対する否定応答の「シテイナイ」を「(マダ)シテイナイ」と「(*マダ)シテイナイ」^[註1]に分けて、「実現想定区間」という概念を用いて、「テイナイ」の意味を論じた。「発話時が該当出来事の実現想定区間内にあり、出来事の非実現が最終的に確定されないうちは、「(マダ)シテイナイ」が用いられる」、「話し手が該当の出来事が実現される可能性そのものを認めない場合は、やはり「(*マダ)シテイナイ」と述べている。

「テイナイ」自体の意味用法に注目した研究としては、工藤(1996)が挙げられる。氏はアスペクト・テンスと否定の関係という観点から出発し、否定の発話を用いる前提は肯定の想定とし、否定のアスペクト・テンス体系を幅広く分析している。その中で、「テイル」と「テイナイ」の非対称関係が現在パーフェクト(本稿の経験に相当)にあると述べ、具体的に「現在パーフェクトは、シタとシテイルの両方^[註2]が担う。が、否定の場合には、シテイナイのみに限定される」と説明している。さらに現在パーフェクトを否定する「テイナイ」が用いられる条件は「肯定的想定が現在或いは現在までにアクチュアル化していないことを表すのだが、〈アクチュアル化の可能性〉はまだ残されている」(工藤1996:95)としている。しかし、現在パーフェクトを否定する場合、下記の(3)、(4)のような「テイナイ」が存在しており、「アクチュアル化の可能性」が必ずあるとは言えないと多くの研究に指摘されている(高橋1988,松田2002,井上2001など)。実際の母語話者の日常会話では、実現の可能性があるかどうかに関わらず、肯定の「シタ」に対して、否定の「テイナイ」が頻繁に使われているという報告もある(ザトラウスキー1983)。そのため、「テイナイ」の意味用法をより明確にする必要があると考えられる。

- (3) 「それ以後、二十七日午前十時ごろに所轄所に出頭するまでのあいだ、君、土井浩三にあったか？」
「あっていません」 (高橋1988:88)
- (4) 昨日、パーティに出た？

a ううん、出ていない(出ない)。

b ううん、出なかった。

(松田2002:35)

2.2 「テイル」・「テイナイ」の習得に関する研究

「テイル」(「テイタ」)の習得に関しては、その様々な用法の習得の難易度に焦点を当てた研究が多い。代表的な研究をまとめてみると、表2になる。

表2 「テイル」の習得順序に関する研究

	データ種類	方法	対象	結果(習得順序)	要因
黒野(1995)	縦断	文法性判断テスト	初級 17名 母語:中国語、ベンガル語など 期間:来日1ヶ月-9ヶ月	動作の継続>結果の状態	動詞の“inherent aspect”
小山(2003)	横断	文法テスト	初級後半から中級後半 母語:韓国語、中国語、その他各25名	動作の継続>結果の状態	母語の過程的転移
許(1997)	横断	オーラルプロダクション 文法テスト	中・上級各30名 母語:中国語	所属・職業>慣用法>形容詞的な働き>習慣・繰り返し>動作の持続>結果の状態>反実仮想>経歴・経験	母語学習環境(インプット)
許(2000)	横断	KYコーパス	初級から超級:90名 母語:中国語、英語、韓国語	正用の出現順序 運動の持続(+長期)>運動の持続(-長期)>性状(+可変性)>性状(-可変性)>繰り返し>結果の状態>状態の変化>経歴・経験	学習環境(インプット) テイルのプロトタイプ性
菅谷(2003)	縦断	日記インタビュー	(OPJ)初級上、中級下それぞれ1名 母語:テルグ語、ロシア語	動作の持続≥結果の状態	学習環境(インプット)
菅谷(2004)	縦断	文法テスト	(OPJ)中上級 61名 母語:ドイツ語、ロシア語、ブルガリア語	動作の持続>結果の状態	形と意味のマッピング 教科書の導入順序

注: >は先に使用すること、≥は先に使用する場合と、同じ時期に使用する場合の両方があることを表す

以上の研究は、対象者、調査の方法がそれぞれ異なるが、「テイル」の習得の難易度に普遍性が観察されている(菅谷2002)。即ち、「結果の状態」と「動作の持続」のみを考察した調査では、「動作の持続」が「結果の状態」より先に使用される。様々な用法の正用の出現順序を調査した場合は、「動作の持続」

が先に使用され、「パーフェクト」(許1997,2000の「経歴・経験」に相当)が最も遅く使用されるという共通した結果が出ている。習得の難易度に影響する要因について、学習環境や教科書などの面から論じる研究が多い。

また、以上の習得研究は縦断か横断のどちらかのみ注目したものであり、縦断と横断両方を合わせて観察したものは少ない。学習者の実際の習得状況を把握するには、横断調査と縦断調査の結果を比較して確認していくことが期待される。

一方、「テイナイ」のみを対象とする習得研究は見当たらないが、「テイル」と「テイナイ」両方を対象にしたものは迫田・家村・川崎・崔(2008)が挙げられる。迫田他(2008)は縦断的学習者コーパスを用いて、「テイル」と「テイナイ」両方を対象に、言語習得において普遍的だと考えられているアスペクト仮説^[注3]が「テイナイ」の習得にも当てはまるのかを検証したところ、「テイル」と異なり、「テイナイ」はアスペクト仮説が予想する習得パターンとは一致しないという興味深い結果に至った。この結果は学習者が「テイル」と異なる過程で「テイナイ」を習得していく可能性を示唆していると思われる。従って、「テイナイ」を「テイル」と異なる項目と捉え、その習得状況を慎重に考察することはアスペクトの習得研究において重要な課題であると考えられる。

2.3 研究目的

以上を踏まえ、本稿は「テイナイ」を「テイル」と異なる文法事項と捉え、横断的、縦断的な視点の両方から「テイナイ」の使用順序を考察することを目的とする。具体的には以下の2点を目的とする。

- ①これまでの「テイル」・「テイナイ」の用法分類を参考にしつつ、非対称関係の観点から「テイナイ」の意味用法の分類を立てる。
- ②学習者コーパスを用いて、意味用法から母語が異なる学習者による「テイナイ」の使用順序を明らかにし、習得の難易度に影響する要因を考察する。

3 「テイナイ」の用法分類の試案

「テイナイ」の用法を分類する際、「テイル」と「テイナイ」との間の非対称関係に着目することにする。まず「テイナイ」を「テイル」と対応する用法と、その独自用法とに大まかに2分類し、さらに両方の下位分類を試みた。具体的に、時制に関係ない「属性」の否定から、過去の事態をもとにして議論している「未完了」と「全面否定」まで、連続的な分類を行った。分類の基準は以下のようにする。

3.1 「テイル」の否定用法

「テイル」の否定として用いられる用法を指す。具体的には以下の4種類に分類した。

- ①属性の否定：時制に結びつかず、特性や恒常的な本質を否定するもの(以下、「属性」)。
 - (5) 努力しても運に恵まれていない。(恵まれている)
- ②状態の否定：発話時(現在)に結びつき、一時的な状態を否定するもの。作用が行われた「結果の状態」と動きのない出来事の継続の状態を否定するものを本稿では、「状態の否定」として一括する。
 - (6) 私は傘を持っていない。(持っている)

後述の趙(2014)の母語話者の使用実態の調査で、いわゆる第4種動詞と共起し、「単なる状態」を表す場合は、「似ていない」などの典型的な「単なる状態」の例の以外に、「腰が曲がっていない」のような「結果の状態」と「単なる状態」のどちらに属するか確認が困難である用例も見られた。実際に、この点を考慮して「単なる状態」を「結果の状態」の一種と位置づける研究もある(西・白井2004)。本稿は西・白井(2004)に従い、「結果の状態」と「単なる状態」を一括し、

さらに状態の恒常性の有無により、「属性」と「状態」に下位分類する。

③進行の否定：発話時（現在）に結びつき、現在において動作が進行中であることを否定するもの。また、同じ動作が何回も行われることによる進行を否定するものも「進行の否定」としている（以下、「進行」）。

(7) 彼は今遊んでないわよ、部屋で勉強してるのよ。(遊んでいる)

④反復の否定：発話時（現在）に結びつき、同じ動作が現在を含む一定の期間に繰り返されることを否定するもの。現在の習慣と動作の繰り返しを本稿で「反復の否定」として一括する。

(8) 最近あまり新聞を読んでいない。(読んでいます)

3.2 「テイナイ」の独自用法

「テイル」と対応しておらず、「テイナイ」独自の用法を指す。本稿では高橋(1988)、松田(2002)などに従い、この「独自用法」をさらに「未完了」と「全面否定」に下位分類している。

⑤未完了：過去の事態を現在に基づいて議論している。出来事が発話時（現在）まで実現されていないが、その実現の可能性が残されていることを示すもの（以下、「未完了」）。

(9) レポートはまだ出してない。(出した)

⑥全面否定：過去の事態を現在に基づいて議論している。出来事が発話時（現在）まで実現されておらず、しかも、その実現しない結果が既に結論になり、実現の可能性は残されていないことを示すもの（以下、「全面否定」）。

(10) 今私の名前、呼んだ？
うん、呼んでないよ。(呼んだ)

以上で挙げた用法をまとめると、表3になる。即ち、左から右に、テンス・アスペクトと関係なく、恒常的な属性を否定するものから、現在の状態や反復を否定するものに進み、さらに過去に端を発し現在に影響があるものへと、連続的な関係になっている。本稿はこの分類に従って学習者のデータを分析していく。

表3 「テイナイ」の用法

用例	肯定	「テイル」の否定用法				「テイナイ」の独自用法	
		属性	状態	反復	進行	経験	
		紅茶にはカフェインが入っていることをご存知ですか。	いつ買ったか今でも覚えている。	いつもこの辺りで買い物をしている。	今は買い物をしている。	彼女の誕生日が来週だから、今日は特別なプレゼントを買った。	
	否定	①属性の否定 爽健美茶にはカフェインが含まれていません。	②状態の否定 いつ買ったか全然覚えていない。	③反復の否定 最近あまり買い物をしていない。	④進行の否定 買い物はしていません。棚を見ているだけだ。	⑤未完了 彼女の誕生日が来週だけど、まだプレゼント買ってない。	⑥全面否定 「お前、大麻をいつから買っただろう。」 「いえ、買ってないです。」

4 学習者コーパスに見られる「テイナイ」の使用順序

4.1 調査概要

縦断調査は国立国語研究所が公開した縦断的学習者コーパス「Corpus of Japanese as a Second language」(以下、「C-JAS」)を用いて行った。「C-JAS」は中国語と韓国語を母語とする学習者計6名(C1、C2、C3、K1、K2、K3)を対象とし、学習開始後3年間にわたり、4ヵ月ごとに行った総時間46時間30分の自由会話をデータ化したものである。全員が来日一年間は同じ日本語学校で学び、その後、専門学校や大学に進学し、日本に滞在していた。日本語学校で使用していた教科書は『日本語初歩』(国際交流基金1981)である。

横断調査は横断的学習者コーパス「KYコーパス」を用いて行った。「KYコーパス」は「ACTFL言語適用能力基準一話技能」に従って行われた初級から超級までの、英語、中国語、韓国語を母語とする学習者(30名ずつ、合計90名)に対するインタビューを文字化したものである。一人ずつのインタビューは

表4-1 C-JASに見られる「テイナイ」の出現順序（中国語母語話者）

対象	C1						C2						C3					
	完了	状態	属性	全面否定	反復	進行	完了	状態	属性	全面否定	反復	進行	完了	状態	属性	全面否定	反復	進行
1期							4	2		1			1					
2期							3	4	1	3	1	1	1	4				
3期	2	4					2	5	2				3	2	1			
4期	2						3	2	1	1			4	5	1		1	
5期		4	1				1	2			1		2	1				
6期	5	2	2	3	1		2				1		2	4	1		2	
7期	5	3	2		2		3	1					1	1				
8期	4	3	7	6	2		2	1	1		2		1	1	1	3		

30分以内とされている。

どちらのコーパスも話題、状況などが様々で、時間的表現に場面による極端な偏りはないと思われるため、学習者の習得状況にある程度反映していると考えられる。両コーパスにおける学習者の発話から文末述語における「テイナイ」の使用例を抽出して考察した。検索する際には、「テイナイ」の縮約形「テナイ」や丁寧体「テイマセン」、「テマセン」などもキーワードにした。ただし、過去形「テナカッタ」や連体修飾節に使われた「テイナイ」などは用法の判定が困難であるため本稿では扱っていない。抽出された「テイナイ」が正用であるかどうかを三人の母語話者に判断してもらい、正用のみを今回の調査対象とした。また、上記の枠組みで分類する際も、筆者自身の判断だけでなく、先行研究であげられた例を裏付けとしながら、母語話者三人と討論した。三人の意見が異なった場合は筆者が判断した。

4.2 調査の結果

4.2.1 縦断調査

「C-JAS」における6人の学習者それぞれが8回のインタビューで使用した「テイナイ」を用法別、時期別にまとめ、表4-1と4-2に示す。

以上の表から、対象者全体が、早い段階で「テイナイ」を使い始め、全体の

表4-2 C-JASに見られる「テイナイ」の出現順序（韓国語母語話者）

対象	K1						K2						K3					
	完了	状態	属性	全面否定	反復	進行	完了	状態	属性	全面否定	反復	進行	完了	状態	属性	全面否定	反復	進行
1期							1						2					
2期													2	3				
3期	1												2	1	1			
4期							1	1	2	1	1		6	5	1	1		
5期	1	1						2	2		1	1	2	1	1		1	
6期	1							1	3	2	1			2	1	1		1
7期		2						2	2			1	1	2	1		2	
8期	1	1						1	2		1		1	1	2	1		

用法が出現するまで、C2以外の5人の学習者の使用にほぼ一致した順序が見られた。いずれも「完了」と「状態」を早くから使用し、「属性」をそれより少し遅れて使用し、「全面否定」と「反復」の用法を最も遅れて使用したことが明らかになった。ただし、「進行」の出現時期は学習者によりばらつきが多く、上級になっても使用数が高くないのは、インタビューという形式で進行中の動作を描写し、否定する必要性のない可能性が考えられる。そのため、「進行」の習得の難易度を判断するのは難しいと考えられる。

4.2.2 横断調査

「KY コーパス」の学習者が使用した「テイナイ」の各用法の使用数を表5に、その使用率の推移を母語別、レベル別に図1-1、1-2、1-3に示す。

表5 KY コーパスに見られる「テイナイ」の出現順序

対象	中国語母語話者						韓国語母語話者						英語母語話者					
	完了	状態	属性	全面否定	反復	進行	完了	状態	属性	全面否定	反復	進行	完了	状態	属性	全面否定	反復	進行
初級														1				
中級	2	3			1		3	6	3				5	2	1			
上級	5	9	4	2	2		2	7	4	1			6	7	2	2	5	1
超級	1	1	1				8	7	3	2	4		3	4		1	3	

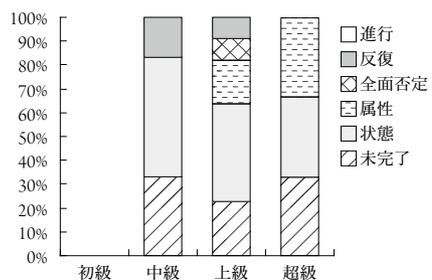


図1-1 「テイナイ」の使用率の推移
(中国語母語話者)

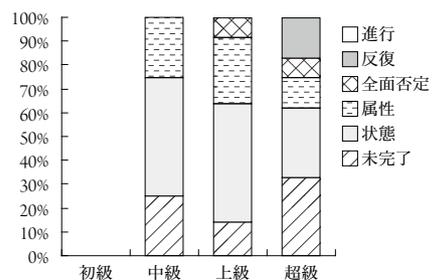


図1-2 「テイナイ」の使用率の推移
(韓国語母語話者)

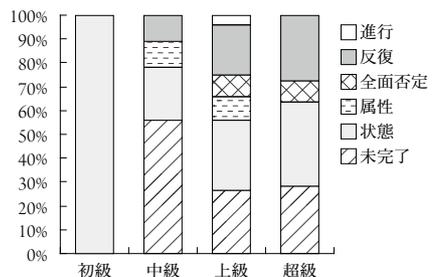


図1-3 「テイナイ」の使用率の推移
(英語母語話者)

「C-JAS」で使用数の少ない「進行」の「テイナイ」は、「KYコーパス」で1例しか見られなかった。これは前述のようにタスクに影響された可能性が考えられるため、習得が困難であるかどうかは判断できない。それ以外には、どの母語のグループも、「未完了」と「状態」の用法を先に使い始め、続いて「属性」、「反復」を使うようになることが明らかになった。一方、縦断調査と同じように、「全面否定」はレベルが上がってもその使用率が増えない。特に母語話者に一番近いと思われる超級の30人の中国語母語話者には「全面否定」が1例も見られないことが分かった。「全面否定」は使用しにくい用法であることが縦断、横断の調査によって確認された。両方の調査結果を合わせ、「テイナイ」の使用順序を下記の通りにまとめる。

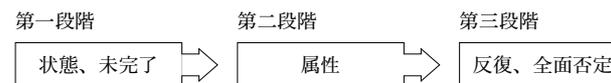


図2 「テイナイ」の使用順序

5 考察

本稿の研究課題は、学習者は共通した順序に従い、「テイナイ」を習得していくのかということである。分析の結果、縦断的調査と横断的調査で中国、韓国、英語を母語とする学習者の間で「テイナイ」の使用に普遍性が見られた。この結果は、学習者の母語以外の要因も習得に関わっている可能性を示唆したと考えられる。両コーパスの対象者はいずれも母語話者からのインプットと教室指導に同時に接触している場合が多いと思われるため、この二つの面から分析する。

5.1 母語話者からのインプット

母語話者はどのように「テイナイ」を使っているのだろうか。趙 (2014) は、話し言葉コーパス (BTSJ) と書き言葉コーパス (BCCWJ) を用いて母語話者の使用状況を調査している。その結果を表6に示す。

表6 各用法の出現数と使用率 (趙2014により作成)

		独自用法		「テイル」の否定用法			合計	
		未完了	全面否定	状態	反復	属性		進行
BTSJ [註4]	出現数	97	91	78	54	29	15	364
	使用率	26.6%	25.0%	21.4%	14.8%	8.0%	4.1%	100.0%
BCCWJ [註5]	出現数	82	90	74	12	35	15	308
	使用率	26.6%	29.2%	24.0%	3.9%	11.4%	4.9%	100.0%

使用頻度を見ると、話し言葉コーパスBTSJでは、「テイナイ」の各用法は「未完了」>「全面否定」>「状態」>「進行」>「反復」>「属性」という順で使われている。その中、「未完了」、「全面否定」と「状態」という三種類の用法は最も多く使われており、合計の使用率は全体用例の70%以上になっていることが分かった。

さらに、学習者に向けられた発話も参考とするため、「C-JAS」と「KYコーパス」から学習者との会話における母語話者の使用例を抽出し分類した。表7-1は「C-JAS」で6人の学習者との8期の対話において、母語話者の使用状況を示すものである。表7-2は、OPI初級、中級、上級、超級へのインタビューに分けて、テストの使用状況を示すものである。言語レベルの低い対象者に対する発話のほうから、「状態」の用法が多く使われ、その使用率は50%を超えていることが分かる。

また、「全面否定」の用法は自然談話と書き言葉（表6）で多く使われているにも関わらず、インタビューで対話者の母語話者がそれほど使っていないことも興味深い。学習者が同じインタビューで「全面否定」の「テイナイ」を使用していないことを考慮すると、インタビューであるため、「全面否定」の用法が生じにくい可能性もあると考えられる。

表7-1 「C-JAS」における母語話者の使用傾向（対日本語学習者）

用法	未完了	状態	属性	全面否定	進行	反復
1期		5		1		
2期	5	8	4	2	3	
3期	6	17	3			1
4期	8	18		4		2
5期	1	7	1	2		1
6期	3	10	3	8		3
7期	2	9	4	1	1	3
8期	3	10	3	2	1	1

表7-2 「KYコーパス」における母語話者の使用傾向（対日本語学習者）

用法	未完了	状態	属性	全面否定	進行	反復
初級	1	4				
中級	9	7	1	1		
上級	9	13	5	2	1	
超級	1	2		1		

勿論、以上のデータは全てコーパスから抽出された発話であり、学習者が実際に受けるインプットと性質が異なると思われる。しかし、学習者が学習初期において、「未完了」、「状態」と「全面否定」に多く触れている可能性を示す。

また、「テイナイ」と共起する出現頻度上位5位までの動詞を挙げると、表7なる。最も多いのは「持つ」、「覚える」である。同じような動詞は母語話者も同様に頻繁に「テイナイ」の形式で使用しているので、「覚えていない」、「持っていない」、「決めていない」といった表現が文法事項としてより、かたまりとして覚えられている可能性が考えられる。

表8 「テイナイ」と共起する動詞（上位5まで）

C-JAS	学習者	覚える (18)、考える (17)、持つ (12)、決める (5)
	母語話者 (対学習者)	持つ (4)、覚える (4)、思う (4)、来る (2)、なる (2)
BTSJ	母語話者 (自然会話)	覚える (35)、来る (15)、行く (15)、言う (12)、持つ (11)

注：() は出現回数である。太字の動詞は母語話者と学習者両方に現れた動詞である。

5.2 教科書における導入順序

教科書における「テイナイ」の導入順序も学習者の使用に影響する可能性が考えられるため、次に6分類の「テイナイ」が初級日本語教科書でどのように扱われているかを考察する。「C-JAS」の調査対象者が使用した教科書『日本語初歩』(1冊)を含んだ9種類の初級教科書^[註6]を調査した結果、「テイナイ」はいずれも「テイル」の否定として捉えられ、「進行」を表す「テイル」とともに提示されている。また、9種類の中の6種類で、「未完了」の用法が導入されており、「まだ」とともに現れているものがほとんどである。こうした先に提示された用法は、教師からの指導の頻度も高くなると予想され、学習者の習得に影響する可能性が考えられる。一方、母語話者が多用する「全面否定」の用法は教科書で1例のみあり、課の最後の読解練習の文章に現れるだけである。このように「全面否定」の用法の指導が足りないため、学習者が母語話者にインプットされてもなかなか文法規則として習得しにくいと推測される。

勿論、今回の縦断調査と横断調査のいずれもインタビュー形式の発話データであったため、学習者の使用はインタビューの形式と話題に影響され、教科書で早い段階で導入された「進行」の用法を使用しにくくなる可能性が考えられる。その意味で、本稿の使用順序は学習者の実際の習得順序を反映できているとは断言できない。今後はタスクタイプを改めて検討していくことが重要であ

ると言えよう。

6 まとめ

本稿では、縦断的及び横断的な発話コーパスによって、中国語、韓国語と英語を母語とする日本語学習者における「テイナイ」の使用順序を考察した。その結果、以下に示すことが明らかになった。

- ①学習者の母語の違いに関わらず、「テイナイ」の使用には共通した順序が見られる。
- ②学習者の母語の違いに関わらず、学習の困難である用法は「全面否定」であり、習得が進んでもその使用数はあまり増えないことが分かった。
- ③母語話者のインプット、教科書の導入順序が共に学習者の習得に影響する可能性が考えられた。

本稿では、これまで肯定と否定を区別せず分析した従来の研究では見えてこなかった「テイナイ」使用の個別性を明らかにすることができた。なお、本稿の考察は正用のみを対象としている。学習者の習得状況を把握するには、誤用パターン（過剰使用や非使用など）の推移を観察し、学習者の誤用の消滅順序を考察する必要があると考えられる。また、前述のように本稿はインタビューを資料としているため、学習者の使用はインタビューの形式と話題に影響される可能性が考えられる。今後はこうした観点から、より直接的に学習者の理解と産出を考察する実験タスクを作成し、さらなる研究を進めたいと考える。

〈首都大学東京大学院生〉

注

[注1] …… 井上 (2001: 134) によれば「(*マダ) シテイナイ」は「まだ」の意味をとみなわない「シテイナイ」を示す。

[注2] …… 工藤 (1996: 83) では「アクチュアル化」とは時間のなかへ現象 (実現) す

ることであると述べている。

[注3] …… 動詞の持つ内在アスペクトがアスペクト形態素の習得に影響を与えているという仮説。

[注4] …… 宇佐美まゆみ監修の『BTSJ』による日本語話し言葉コーパス2011年版。

[注5] …… 2011年国立国語研究所が公開した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』。

[注6] …… 調査した教科書は『みんなの日本語初級』(スリーエーネットワーク)『初級日本語 げんき』(ジャパントイムズ)『新文化初級日本語』(文化外国語専門学校)『日本語初級 大地』(スリーエーネットワーク)『日本語初歩』(国際交流基金)『新版中日交流標準日本語初級』(人民教育出版社)『新編日語(修訂本)』(上海外语教育出版社)『일본어』(고려대학교출판부)『초급현대 일본어』(한국외국어대학교출판부)の9種類である。

参考文献

- 庵功雄 (2001a) 「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学センター紀要』4, pp.75-79.
- 井上優 (2001) 「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について」つくば言語文化フォーラム (編)『「た」の言語学』pp.97-159. ひつじ書房
- 金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」金田一春彦 (編)『日本語動詞のアスペクト』pp.27-62. むぎ書房
- 許夏珮 (1997) 「中・上級台湾人日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断研究」『日本語教育』95, pp.20-29.
- 許夏珮 (2000) 「自然発話における日本語学習者による「テイル」の習得研究—OPIデータの分析結果から」『日本語教育』104, pp.20-29.
- 許夏珮 (2004) 『日本語学習者によるアスペクトの習得』くろしお出版
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 工藤真由美 (1996) 「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」『ことばの科学』7, pp.87-136. むぎ書房
- 黒野教子 (1995) 「初級日本語学習者における「テイル」の習得について」『日本語教育』87, pp.153-164.
- 小山悟 (2003) 「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性—母語の役割と影響を中心に」小山悟他 (編)『言語と教育—日本語を対象として』くろしお出版
- 迫田久美子・家村伸子・川崎千枝見・崔延朱 (2008) 「縦断的発話コーパスに見る日本語学習者の文法習得—日本語習得マップつくりのための基礎研究」『2008年度日本語教育学会秋期大会予稿集』pp.197-208.
- 菅谷奈津恵 (2002) 「第二言語としての日本語のアスペクト習得研究概観—「動作の持続」と「結果の状態」のテイルを中心に」『言語文化と日本語教育』2002年5月特集号, pp.70-86.
- 菅谷奈津恵 (2003) 「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究—「動作の持続」と「結果の状態」のテイルを中心に」『日本語教育』119, pp.65-74.

- 菅谷奈津恵 (2004) 「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究—L1の役割の検討」『日本語教育』123, pp.56-65.
- 高橋太郎 (1988) 「うちけしのテンスについて」『麗澤大学紀要』47, pp.75-96. 麗澤大学
- 趙麗雯 (2014) 「日本語母語話者コーパスに見られる「テイナイ」の使用実態—日本語教科書の扱い方との比較」『韓国日語日文研究』91, pp.454-476.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 西由美子・白井恭弘 (2004) 「会話のける「テイル」の意味—アスペクト二構成要素理論による分析」南雅彦・浅野真紀子 (編) 『言語学と日本語教育3』 pp.231-249. くろしお出版
- 藤井正 (1966) 「動詞+ている」の意味」金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』, pp.97-116. むぎ書房
- 松田文子 (2002) 「「過去時ニ何々シタカ」に対する否定の返答形式—シテイナイとシナカッタの選択に関して」『日本語教育』113, pp.34-42.
- 吉川武時 (1973) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦 (編) 『日本語のアスペクト』 pp.267-293. むぎ書房